

# 海外旅行アラカルト

新井 宏

観光事業の救済が急務である。

十月一日から「Go To トラベル」が本格的にスタートした。目の前に「にんじん」をぶら下げて、旅行を奨励してくれるという。

子育ての頃、我が家には、①車がなく、②エアコンがなく、③犬がいなかった。娘は「よほど貧乏なんだ」と思っていたという。しかし、家族旅行は欠かさず、その後登山や旅行は我が家の生活の一部であった。

いわば「旅行好き」でありながら、コロナ禍のなかの「Go To トラベル」には強い違和感がある。

それというのは、国の一連のコロナ対策が、あまりにもチグハグで、「宣言発令」による移動規制で膨大な社会的損失を生んだ一方で、こんどは一兆七千億円の巨額を投じて旅行を奨励したかと思うと、またもや感染者急増のため「Go To」の停止を図ると言う。

そもそも第一波のコロナは、ヨーロッパでも、東アジアや東南アジア諸国でも、三月をピークに四月に入ると一斉に終息に向かっていた。その中で、政府は「このまま行くと二週間後には八倍、一ヶ月後には六十四倍になる」と国民を恫喝して、四月七日に「緊急事態宣言」を発令、「通院・買い出し・通勤」を除く不要な外出を規制し、観光業界の被害を拡大させてしまった。「宣言」の発令などしなくとも第一波は既に終息に向かっていたのである。

このことは「宣言」直後、状況の推移が判らない四月九日付けで『まんじ』一五七号に書いた。その後、状況があきらかになるに従って、専門家たちの間でも、「宣言」の効果は極めて限定的であったとの認識が一般化している。

しかも「Go To トラベル」を本格的にスタートさせた十月初旬は、奇妙なことに四月の「宣言発令時」よりも

むしろ感染者数が多かった。ましてや、ひとあし先に秋が訪れたヨーロッパでは既に第二波が猛威をふるい始めていた。そのことを学べば「Go Toトラベル」など暢気なことを言っている場合ではなかった。

事実、この原稿を書いている十二月初旬には感染者数が「宣言発令」を決めた日の十倍に達してしまっただけでは、「Go Toトラベル」運用の中止をせざるを得ない。一兆七千億円の巨額はどこに消えてしまうのである。か。五百億円もかけた「官製マスク」と同様に、群がる利権業者に霧散してしまうに違いない。

ヨーロッパで先行していた第二波の大流行は、ここに来て、北欧を除けば、西欧・東欧で減少にむかっている。日本を含む韓国、台湾、香港では、未だ増加傾向が続いているが、間もなくヨーロッパの後を追って、横ばいから減少に向かう期待もある。

しかし楽観できる状況ではない。今後「Go Toトラベル」を続けても、中止しても、結局観光業者の救済には、役立たなかったという評価になるであろう。

さあ、ここまで書くと、いつか書いた「八つ当たり語録」の再開となりそうなのでこの辺でやめる。

海外旅行は十年ほど前からお休みしている。おそらく年齢や家族、コロナのことを考えるともう機会がないだ

ろう。

そう思っただけで写真等をパソコンに入力して処分している、と思いついて整理してしまいたいのである。

今回は、海外旅行アラカルトと題してそのメモを作る。

## 会話

海外ツアーに参加しているといろいろな夫婦に出会う。日本には、夫婦揃っての「社交」の場は乏しいが、海外ツアーは「疑似社交」の場でもある。

◆ブダペスト・ドナウ河中洲マルギット島(2000.6.26)  
前を歩いているツアー同行のご夫婦がどちらへ行くかでもめていた。うしろに私達がいるのに気付いていない。

ご主人「間違っていたらぶつとばすぞ」

奥様も負けずに「違っていたらけつとばすわよ」

ご主人は飛行機操縦を趣味とし、葉巻をくゆらす教養人、ご夫婦とは食卓では話しが弾むのであるが、何とも過激な会話である。

◆マドリッド王宮広場(2000.11.3)

「パンブローナの写真、撮っておけ」と女性の声が響いてきた。ご主人は唯々として指示に従っている。

ご主人はパンブローナに進出した日系自動車部品会社の責任者とのこと。パンブローナはスペインからの分離運動が激しかったバスク地方の中心地、フランシスコ・

むしろ感染者数が多かった。ましてや、ひとあし先に秋が訪れたヨーロッパでは既に第二波が猛威をふるい始めていた。そのことを学べば「Go Toトラベル」など暢気なことを言っている場合ではなかった。

事実、この原稿を書いている十二月初旬には感染者数が「宣言発令」を決めた日の十倍に達してしまっただけでは、「Go Toトラベル」運用の中止をせざるを得ない。一兆七千億円の巨額はどこに消えてしまうのであろうか。五百億円もかけた「官製マスク」と同様に、群がる利権業者に霧散してしまうに違いない。

ヨーロッパで先行していた第二波の大流行は、ここに来て、北欧を除けば、西欧・東欧で減少にむかっている。日本を含む韓国、台湾、香港では、未だ増加傾向が続いているが、間もなくヨーロッパの後を追って、横ばいから減少に向かう期待もある。

しかし楽観できる状況ではない。今後「Go Toトラベル」を続けても、中止しても、結局観光業者の救済には、役立たなかつたという評価になるであろう。

さあ、ここまで書くと、いつか書いた「八つ当たり語録」の再開となりそうなのでこの辺でやめる。

海外旅行は十年ほど前からお休みしている。おそらく年齢や家族、コロナのことを考えるともう機会がないだ

ろう。

そう思つて写真等をパソコンに入力して処分していると、思い出まで整理してしまひそうである。

今回は、海外旅行アラカルトと題してそのメモを作る。

## 会話

海外ツアーに参加しているといろいろな夫婦に出会う。日本には、夫婦揃つての「社交」の場は乏しいが、海外ツアーは「疑似社交」の場でもある。

◆ブダペスト・ドナウ河中洲マルギット島(2000.6.26)  
前を歩いているツアー同行のご夫婦がどちらへ行くかでもめていた。うしろに私達がいるのに気付いていない。

ご主人「間違っていたらぶつとばすぞ」

奥様も負けずに「違つていたらけつとばすわよ」

ご主人は飛行機操縦を趣味とし、葉巻をくゆらす教養人、ご夫婦とは食卓では話しが弾むのであるが、何とも過激な会話である。

◆マドリッド王宮広場(2000.11.3)

「パンブローナの写真、撮っておけ」と女性の声が響いてきた。ご主人は唯々として指示に従っている。

ご主人はパンブローナに進出した日系自動車部品会社の責任者とのこと。パンブローナはスペインからの分離運動が激しかったバスク地方の中心地、フランシスコ・

石橋で、その袂にスメタナ博物館がある。

そこからカレル橋を前景に聖ヴィート大聖堂を見上げる写真が、プラハの看板である。スメタナの交響詩「我が祖国」の「モルダウ」の影響であろう。小説、絵画よりもはるかに大きな影響をもたらすが音楽である。

ツアアの限られた自由時間を割いてスメタナ博物館を訪れた。

びっくりしたのは受付のおじさんが美味しそうにジョッキを傾けていたことである。チエコは良いところだと思った。あるいはボランティアが受付をしていたのかも知れない。ビールをどこで入手できるか訊ねたかった。

受付を通過して二階に上がると晩年スメタナが住んでいた所が博物館になっている。観客は他に誰もいない。日本人も時々くるらしく、日本関係の資料もある。もしかしたら、日本人は大のお得意さんなのかも知れない。

私達だけで博物館を占有している気分もあって、丁寧に見て廻った。コメントに従って機器を操作するとモルダウの曲が流れる。もしビールがあったら至福の時間であつたらうに。

◆ルクセンブルクのホテル (1997.9.23)

計量史関係の国際会議がドイツのジーゲンで開かれるので、十日間ほどの休暇をとって妻と一緒に参加した。その際に貴腐ワインの名産地、モーゼル河を廻りトリー

アまで足を延ばした。ドイツで最も古い二世紀のローマ遺跡、ポルタニグラ(黒い門)や円形劇場跡を見たかったからである。

ところがトリーアの駅についた時に、ルクセンブルク行きの三両編成の電車が目に入った。間もなく出発するというので、取りあえず飛び乗った。

ルクセンブルクについての知識はなかったが、一昔前の鉄鋼生産地。電車で一時間もかからない距離。

駅の案内所で徒歩圏内のホテルを予約した。鉄鋼の街と思っていたが、かなり洗練された町並みである。

受付で手続きをしていると「アッシュアライ？」と声をかけられる。「お支払い？」と言っているようだ。日本人観光客が多いのかと思いつながら「カード」ですという、そばで妻が「アッシュ・新井」と言ったのよと言う。それなら「ムッシュ・新井」じゃないかと思つたが、フランス語でHのことをアッシュと発音すること。何のことはない「H・アライ」と名前を確認しただけのことだった。

ホテルは多くの中小ホテルの家屋を合わせて、受付、宿泊、食堂、共通エリアと使い分けているらしい。見かけよりもかなり大規模である。

夕食は官庁街の中心地にある高級レストランに入った。ちよつと気張って高級料理を頼んだのまではよかったが、カードで会計する時に、チップを上げ忘れることを忘れて

しまった。お酒を飲んでリラククスしたせいだろうか、あるいは緊張していたせいであるうか。今、思い出してもちよつと恥ずかしい。

ルクセンブルクは人口六十万で相模原市より少ない。しかしひとり当たりのGDPではいつも世界一、二位を占める豊かな金融国家。妻はノートルダム大聖堂に生花が捧げられているのを見て、とても豊かな地だといっていた。女性の判断基準は面白い。

◆ハンガリーのシヨブロン鉱山博物館(2000.6.22)

シヨブロンはハンガリーというよりもオーストリアのウイーン側に食い込んだ位置にある六万人ほどの町。ローマ遺跡の上に来た町なので考古学博物館があるが休館中。その代わりに間口二十メートルほどの小さな鉱山博物館を見つけて入った。

展示物は一般向けであったが、どうやらシヨブロンは中世の鉄生産地だったようだ。近くに大きな湖があるので沼鉄鉱(褐鉄鉱)を原料としていたにちがいない。そして受付のおばさんに何か参考資料がないか尋ねてみた。そんな観光客はめずらしいらしく、結構時間を割いてパンフレット類や論文集を持ってきてくれた。その中に東欧地区を主体とする古代・中世の鉄生産に関する研究論文集を見つけた。垂涎の資料であった。

日本の製鉄史研究者は、あまりヨーロッパの製鉄史について知らない。ある程度勉強していてもせいぜい西欧

の研究とまりである。私はかねがね定説に逆らって弥生時代の日本でもヨーロッパのように小規模な沼鉄による製鉄が始まっていたと主張していた。

研究論文集は大部分現地語で書かれている。趣味で研究しているアマチュアの論文が多いからであるう。幸運だったのは、シヨブロン鉱物博物館がマリア・テレジアの設立したヨーロッパ初の鉱山学校を引き継いでいたことである。あまり言葉は通じなかったが、受付のおばさんには感謝、感謝であった。

## 祝祭

◆ルーミアニア・ベルサナ村のお祭り(2003.6.30)

ルーミアニアの奥地とでも言うべきマラムレシュは今や観光名所である。その地域をバスで廻っている途中、バス道に沿って村人たちが列をなして歩いているのに出会った。若い女性達は白いブラウスに華やかな色柄のミニスカート、小柄で腰回りが豊かになった女性達も無柄ではあるが、赤、黒、濃紺と色とりどりのミニスカート姿である。ベルサナ修道院を会場とする村のお祭りであった。

添乗員もガイドもその日が村の祝祭日であることを知らなかったようだ。急遽下車して三十分ほどお祭りに参加した。

村の修道院といえば、小さな建物を想像するが、木造三階建の堂々たる建物が二棟、桁行二十メートル、梁行十メートル、高さ十五メートルほどある。その他に教会、鐘楼や建築中の建物もある。

このお祭りに日本人が来ているとのことで、地元の新開記者の取材を受けた。翌日の新聞に載ったと思うが確認してない。

予期せぬ出会いに一同大喜び。偶然というのは楽しいことだ。

その後、マラムレシユ地方の古い修道院を数多く訪問したが、これほど大規模なものはない。どうやら、その頃ベルサナ修道院は新しく建築中であってまだ観光地としては知られていなかったらしい。いまインターネットで調べるとマラムレシユ地方を代表する観光地として載っている。

この地方の古い建造物が木造なのは、良質な木材が得られるからであろうが、その建築技法が驚くほど日本の寺院建築と似ている。なんとかその詳細を知りたいと思いつながら、まだ良い資料に出会わない。ただし、その後知ったことであるが、ルーマニアからかなり離れたノルウェーにも良く似た建造物がある。北イタリアの古い民家の木組みも校倉造りに良く似ている。

◆シチリア島アグリジェントのアーモンド祭り (2000.2.12)  
アグリジェントは古代ギリシャの神殿群の遺跡が残り、

「神殿の谷」と呼ばれ、世界遺産に指定されている。ギリシャには行ったことがないが、ギリシャ以上にギリシャ遺跡が多く残っているのはトルコとシチリア島だという。とにかくその広大さにはびっくりした。

ホテルは古い市街地に続く街道沿いにあった。案内図をもらって散歩しているとかなりの人波である。折からのアグリジェント「アーモンドの花祭り」であった。後で知ったが日本からのツアーが幾つも出ているとのこと。しかも土曜日で世界から民族舞踊団が集まり行進をする日であった。ラッキー。

アテナア門からアテナア通りに入ると教会があり、ミサでもあるのだろうかものすごい人だかりである。ちよつと並んでみたが、民族舞踊団の行進が始まったのでそちらに廻る。アテナア通りは既に暗くなり電飾されていた。

先頭を、タータン模様のキルト(スカート)を佩いて、バクパイプを演奏しながら数十人が行く。解説がなくともスコットランドと判る。その後ろを二人だけであったが、黒マントに赤いマフラーの騎乗姿の衛兵も行く。

踊りながらの行進は、阿波踊りにも似ているようだ。日本からも阿波踊りのグループが参加していたに違いない。

◆ミュンヘンのオクトーバーフェスト (1997.9.21)  
大きなテントの中でビールを飲む祭典とは聞いていたが、その規模のおおきさにはびっくりしてしまった。テ

セン駅)から登山電車でセーチエニの丘へ、そこから小一時間歩いて、ヤーノシユ山のエリジャベド展望台まで行った。

私達がツァーの自由時間に、変わった行動をするのを知っているNさん達が一緒に行くと言う。エリジャベドはもちろんヨーロッパ随一の美貌を謳われたオーストラリア・ハンガリー二重帝国の皇妃エリザベートのこと。姑のゾフィー大公妃と合わず、ウイーンの宮廷を嫌い、ブタベストに滞在することの多かったエリザベートはハンガリーで人気があり、エリザベート橋もある。

◆サンマリノの峰ロッカ・オ・ケスタ(729m)(2008.6.5)  
今度の新型コロナウィルスで最も死亡率が高かった国サンマリノは中部イタリアにある人口三万三千名の独立国、観光で成り立っている。観光案内所に行くとパスポートに捺印してくれる。一六三一年にローマ法王庁から独立を承認されたという。天然の要塞であり攻め取っても大した価値のないところが、独立を維持できた原因であろうか。

◆パリ・モンマルトルのサクレ・クール寺院(1992.9.23)  
モンマルトルの丘は芸術家たちが集うパリで最も高いところ。その丘の上に八十五メートルのサクレ・クール寺院が聳える。眼下に見下ろすパリ市街地が私達の専有物になった気分であった。

◆ヴィアナドカストロのサンタ・ルジア教会(1999.10.13)

ポルトガル・ポルトの北約七十キロメートルにある、標高二四九<sup>四</sup>のサンタ・ルジア山の上に立つ教会。パリのサクレ・クール寺院と良く似た教会。とにかく登った。

◆フィレンツェ大聖堂のクーボラ(2008.6.6)  
サンタ・マリア・デル・フィオーレの八角クーボラ(一五<sup>四</sup>)とジョットの鐘楼(八五<sup>四</sup>)は並んで立ち、共に頂上近くまで登れる。フィレンツェの瓦屋根の町並みが美しい。クーボラの内径は四十三<sup>四</sup>で、ローマのパンテオンやサンピエトロ大聖堂のドームよりやや大きいようだ。

◆バルセロナ サクラタ・ファミリヤの塔(2000.11.12)  
歩いて登ったように記憶しているが今はエレベーターがついている。一八八二年に着工したガウディの代表作で、その没後百年の二〇二六年完成を目標としていたが、コロナ禍のためにまた遅れるとか。

◆ブルガリアの古都ヴェリコ・タルノヴォの丘(2003.6.26)  
十二世紀から十四世紀にかけて、第三のローマと称しバルカン半島全体を支配したブルガリア帝国の首都。ツアレヴェツツの丘を中心に要塞が築かれていた。頂上に立つ教会の塔に登ろうと急いだが、集合時間に遅れそうなので途中から引き返した。同行した方が「ゆっくり帰りましょう。集合場所が見えたら急げばいいのよ」という。なるほどなるほど。

セン駅)から登山電車でセーチエニの丘へ、そこから小一時間歩いて、ヤーノシユ山のエリジャベド展望台まで行った。

私達がツアーの自由時間に、変わった行動をするのを知っているNさん達が一緒に行くと言う。エリジャベドはもちろんヨーロッパ随一の美貌を謳われたオーストラリア・ハンガリー二重帝国の皇妃エリザベートのこと。姑のゾフィー大公妃と合わず、ウイーンの宮廷を嫌い、ブタベストに滞在することの多かったエリザベートはハンガリーで人気があり、エリザベート橋もある。

◆サンマリノの峰ロッカ・オ・ケスタ(729m)(2008.6.5)  
今度の新型コロナウイルスで最も死亡率が高かった国サンマリノは中部イタリアにある人口三万三千名の独立国、観光で成り立っている。観光案内所に行くバスポートに捺印してくれる。一六三一年にローマ法王庁から独立を承認されたという。天然の要塞であり攻め取っても大した価値のないところが、独立を維持できた原因であろうか。

◆パリ・モンマルトルのサクレ・クール寺院(1992.9.23)  
モンマルトルの丘は芸術家たちが集うパリで最も高いところ。その丘の上に八十五メートルのサクレ・クール寺院が聳える。眼下に見下ろすパリ市街地が私達の専用になった気分であった。

◆ヴィアナドカストロのサンタ・ルジア教会(1999.10.13)

ポルトガル・ポルトの北約七十キロメートルにある、標高二四九呎のサンタ・ルジア山の上に立つ教会。パリのサクレ・クール寺院と良く似た教会。とにかく登った。

◆フィレンツェ大聖堂のクーボラ(2008.6.6)  
サンタ・マリア・デル・フィオーレの八角クーボラ(一五呎)とジョットの鐘楼(八五呎)は並んで立ち、共に頂上近くまで登れる。フィレンツェの瓦屋根の町並みが美しい。クーボラの内径は四十三呎で、ローマのパンテオンやサンピエトロ大聖堂のドームよりやや大きいようだ。

◆バルセロナ サクラダ・ファミリヤの塔(2000.11.2)  
歩いて登ったように記憶しているが今はエレベーターがついている。一八八二年に着工したガウディの代表作で、その没後百年の二〇二六年完成を目標としていたが、コロナ禍のためにまた遅れるとか。

◆ブルガリアの古都ヴェリコ・タルノヴォの丘(2003.6.26)  
十二世紀から十四世紀にかけて、第三のローマと称しバルカン半島全体を支配したブルガリア帝国の首都。ツアレヴェツツの丘を中心に要塞が築かれていた。頂上に立つ教会の塔に登ろうと急いだが、集合時間に遅れそうなので途中から引き返した。同行した方が「ゆっくり帰りましょう。集合場所が見えたら急げばいいのよ」という。なるほどなるほど。

## 買い物

ご婦人方の楽しみは買い物。ツアーで人気のあるのは、土産店よりもむしろスーパーマーケット。日本では見かけない現地の日用品をゆつくり探して定価で買える。

### ◆イタリアのミラノ (2008.5.31)

ホテルの近くの地下街に大きなスーパーがあった。寿司の折詰めがほぼ日本並みの値段で沢山並んでいる。びつくりしたのはその当時にセルフレジがかなり設置されていたことである。

### ◆スペインのマラガ (2000.11.9)

マラガのスーパーもエスカレーターで各階を結び共通清算であった。スーパーマーケットの先進地相模原に住んでいてもびつくりするくらい進んでいた。

### ◆エジプトの買い物ゲーム (2009.2)

エジプトでの買い物は、日用品まで含めて「値切りゲーム」の様相である。

ちよつと特殊な日本製カメラを持って出掛けたが、途中でフィルムを無くしてしまった。さあ大変、大急ぎでカメラ店を見つけると、同じ型のフィルムがある。かなり高かったが数本確保した。ただし、翌日ホテルで同じタイプのフィルムを簡単にみつつける。三分の一の値段。それからは私達の交渉目標は三分の一と決めた。ツアー同行の方々は二分の一になったと大喜びしているので、

私達が三分の一で買ったとは言えない。

ただし、金のカルトウーシユ（王名版）は地金の価格の比率が高いので、あまり割り引いてはくれなかった。でも現在の金価格はその頃の五倍になっているので儲かっていると思う。

### ◆トルコのカッパドキア (2006.4.14)

妻が分不相応なトルコ石を買った。トルコ石の原産地だと思ったからであろうが、トルコではトルコ石を産出しない。

その翌日、カッパドキア地下洞窟内の工芸品店に案内された。数十人の観光客を前にして工房主がいろいろと説明してくれる。絵や焼き物はなかなか良さそうだと。ところが、説明が終わるやいなや、工房主が私達を目標してまっしぐらにやってくるではないか。もうトルコ石のことが伝わっていたらしい。品物は気に入ったが一切買わなかった。

### ◆観光バスでの必需品

観光バスでの必需品は飲料水とトイレ用の小銭。いずれもトイレ休憩所のボールなどで調達する。アルコール入りの水さえ問題なく飲める私などちがって、硬水が駄目な人が多いが、現地語が読めず間違つて買ってしまう人もいる。容器に触ってみて堅いのが硬水、柔らかいのが軟水と教えて差し上げた。

## ガイドと添乗員

観光国のツアーでは原則として資格のあるガイドが英語で説明し、添乗員が通訳してくれる仕組みになっている。しかしベテランの添乗員になると同じコースを何回か案内している内に、大抵のことは頭に入り、ガイドの説明がなくとも日本のお客がどんなことに興味をもつか知って説明してくれるので判りやすい。

大変なのは、初めてのコースの添乗員。しかし商売であり、事前に良く勉強しているので、さすがだと思う。

現地ガイドが全行程同行する場合は多いが日替わりで付く場合もある。その他に、現地で生活をしている日本人をガイドとして雇っている場合もある。そんな場合でも資格のあるガイドがつく。

### ◆プラハからビルゼン等の観光 (2000.6.15)

プラハからドイツ国境よりのビルゼンやカルロビバリへ一日ツアーに出かけた。まだ若い日本の女性がガイド役で同乗している。数年前にプラハがどこにあるのかも知らずにやってきたというが、ガイドの出来も現地語も抜群だと感心した。日本の女性もすごい。

### ◆ローマからボンベイ行き観光バス (2008.6.10)

ローマからボンベイ行きの観光バスに乗った。日本人観光客専用である。

面白かったのは、現地ガイドは最初から最後まで日本

人の非資格ガイドにまかせきりで、ほとんど何もしないのである。ところがボンベイの遺跡に見られる鉛や鉄について質問するとさすがに適切な返事や見解を述べてくれた。要は、資格のない日本人ガイドへの心遣いで、ついでに楽をしているのだ。イタリア人らしい。

### ◆ポルトガルの周回ツアー (1999.10)

ポルトガル十三日間のツアーに参加した。添乗員の女性は何が初めてのコースらしい。

何か事情があつてか城塞都市エルバスの観光に添乗員もガイドも同行せず、一行は指示された通りに丘を登っていった。しかし目的地に到達できず、結局時間切れとなつて戻った。おそらく現地ガイドの説明を添乗員が間違えて伝えたのであろう。間違いは仕方がないが、その頃から添乗員の評判が悪くなる。

バスの中でも、現地ガイドの説明が途絶え勝ちで、添乗員も黙っている。リスボンのテージョ河の三角江に架けられたヴァスコ・ダ・ガマ橋は前年に開通したばかりのヨーロッパ最長十七キロの斜張橋であるが、そこを通過する十分ほどの間、ほとんど説明が無かったのにはあきれてしまった。

そしてツアー参加者の間に世論のようなものが形成されてしまう。いつもは評判の良い添乗員だったのにと会社の方でも驚いたようである。

## 塩野七生

塩野七生は気が強く何かと周辺と摩擦をおこすと聞か  
が書き物はすばらしい。最初、男性かと思って読んでい  
たが、途中で旦那さんの話が出てきてびっくりした。

### ◆イタリヤのベネチア (2008.6.2)

もう四十年近くも前になるが、会社創立五十周年記念  
に、塩野七生の『海の都の物語』を下敷きとして書いた  
論文が最優秀賞となり金杯をもらった。

人口わずか十万人の通商都市国家ベネチアが地中海に  
覇を唱え続けた千年の歴史……。それは強大国のトルコ  
やフランス、ハプスブルグ家に対して、常に現実に徹し  
きって守り抜いた地位であった。わが社もそれに学ばな  
ければというのが主旨であったが、とにかくベネチアに  
惚れ込んでしまった。

そんなことを言いながら人生は不思議、やっと訪問出  
来たのは、私達の最後のヨーロッパ旅行の時である。ベ  
ネチアがなぜ外敵を守りきったのか、それはやはりラ  
グーン中に迷路のように張り巡らされた浅瀬のお陰だっ  
たことを改めて実感した。

### ◆トルコのイスタンブール (2006.4.22)

『海の都の物語』のすぐ後に「コンスタンチノープル  
の陥落」が出版された。東ローマの帝都コンスタンチ  
ノープルはエルサレムに向かうはずの第四回十字軍に

よっていったん征服されたが十五世紀まではなんとか生  
きのびていた。しかしその地は強固な城壁に守られてい  
たとはいえ、四周わずか二十六キロメートルで渋谷区ほ  
ど、周囲は全てオスマントルコの支配地であった。ベネ  
チア、ジェノヴァ等の援軍を合わせても七千人の兵力で  
メフメト二世の十六万の包囲を二ヶ月間耐えたが遂に墜  
ちた。

イスタンブールでは、観光の他に、城壁や「船山にの  
ぼる」のガダラ地区を歩きまわった。

ヨーロッパに対するオスマン帝国の優勢は第一次ウ  
イーン包圍(1539)に始まり第二次ウイーン包圍(1683)  
年の失敗でやっと終わる。

### ◆マルタ島のバレッタ (2000.2.15)

一五六五年にオスマン帝国は地中海のマルタ島を四万  
八千人の大軍で包圍した。要塞を守るのはマルタ騎士団  
長バレッタ以下三千人、最終的に包圍軍の撃退に成功し  
た。この戦いについて塩野七生も書いていたと勘違いし  
たが、それは聖ヨハネ騎士団の『ロードス島攻防記』の  
印象からであった。

ロードス島で敗れ放浪する聖ヨハネ騎士団にスペイン  
王カルロス一世(神聖ローマ皇帝カール五世)がマルタ  
島を与える。そしてマルタ騎士団となってオスマンに  
勝った地がバレッタと名付けられた。

面白かったのは、「北方領土返還」のマークを付けた

中古車が走っていたことである。今でも人口四十万余のマルタに毎年五千台程、日本の中古車の輸出されているそうである。

◆イタリアのフェラーラ (2008.6.3)

イタリアの歴史に夢中になったのは塩野七生の「チエーザレ・ボルジアあるいは優雅なる冷酷」を読んだ頃からである。副題名が素晴らしいと思った。

十五世紀末のイタリア。法王の庶子チエーザレ・ボルジアが群立する都市国家の統一を目指し、権謀術数を駆使しロマーニャ地方を次々に法王領化していった。

いわば織田信長のような人物。マキアヴェリが『君主論』で君主のあるべき姿として称賛しているが、信長の妹お市の方と同じく、美人の妹ルクレッツィアが政略結婚を繰り返したとことまで良く似ている。

そのルクレッツィアの最後の夫がフェラーラの領主アルフォンソ一世、彼の姉にルネッサンスの華と謳われたイザベッラ・デステがいる。

ルクレッツィアの墓があるというので行って見たかったが時間の点で断念した。

お酒談義

私にとって旅行の楽しみに「お酒」がある。四十年以上一日も欠かさず飲んでいるのでベテランであるが、味

覚に無頓着なので利き酒はできない。だから有名なお酒とか高価なお酒に興味があるわけではない。

しかし酒飲みなので、飲みながら講釈をすることが多い。以下、旅行で出会ったお酒の話。

◆酒精強化ワイン

ワインにブランディを加えたようなアルコール度の高い品種。著名な銘柄としては四種あるが、その内、ポトワイン（ポルトガル・ポルト2000.10.12）、シエリー（スペイン・カディス 2000.11.7）、マルサラワイン（シチリア・マルサラ 2000.2.12）の現地で宿泊または試飲している。日本にも戦前から酒屋の赤玉ポトワインという安価な疑似ワインがあったが、もちろん別種。

◆貴腐ワイン

極めて糖度の高いブドウを原料に特殊な製法で作られた甘口ワインなので一般的に最高級ワインとされている。著名な銘柄としては三種あるが、その内ドイツのモーゼル地方（1997.9.24）とハンガリーのトカイ地方（2000.6.24）を訪問している。

トカイ平原はハンガリーの東北部、モンゴル帝国のジュチ家の当主バトゥ率いるモンゴル帝国軍とハンガリー王ベーラ四世率いるハンガリー軍等の間の「モヒの戦い」があったところである。両軍ほぼ一万人の戦闘であったか、ハンガリー側が大敗しベーラ四世はクロアチアにいったん亡命し、ハンガリー全域がモンゴルの支配

下に入った。勢いに乗ったモンゴルはさらにウイーンを  
目指したが、モンゴル帝国大ハーンのオゴデイの死に  
よって、バトウはハンガリーを放棄して帰国した。

◆ビルゼン・ビール 世界には百種類ほどのビールが  
存在するが、大分類はエールビールとラガービール、そ  
のラガービールにピルスナーやパドワイザーなどがあり、  
日本のビールはほとんどピルスナーである。

ピルスナーの発祥地はチェコのピルゼン、工場見  
学と試飲ででかけた(2000.6.15)。またパドワイザー  
の故郷チェスケー・ブジェヨヴィツェにも宿泊した  
(2000.6.17)。その他、デュセルドルフのレストラン・ツ  
ム・シフヘンでエールビールの代表格アルトビールを飲  
んだこともある(1997.9.21)。ナポレオンもそこに座っ  
て飲んだと聞いた。

## 音楽

日頃、判りもしないのに、絵画は東洋が良いけれど音  
楽は西洋が圧倒的だなどと言っている。

ドイツではライン河下りの観光船のなかで、ローレラ  
イの合唱が始まるのはめずらしくもないと聞くが、航  
空機のなかでも始まったのにはびっくりした。しかも、  
ハーモニオもなかなか良い。教会の賛美歌・聖歌のせい  
であろうか。

ヨーロッパ旅行はどうしても建築や絵画が中心となる  
が、それではと言うので、音楽についても少し力んでみ  
た。

◆チェコ・プラハ国立オペラ座 トスカ(2000.6.16)  
ツアー同行のご夫婦が日本でオペラ座の公演を予約し  
てきたと言う。それではということで私達も当日券を申し  
込んだ。「トスカ」ならきつと知っているメロディが出  
て来るだろうと。

二階だけが良い席。三幕ものであったが、途中で居眠  
りばかり。結局、なじみの旋律もなく終わってしまった。  
タクシーでホテルに帰る途中、プラハの夜景がうつく  
しいので、三十分ほど観光ドライブ。今度は居眠りなど  
しなかった。

◆ハンガリー・ペーチアマチュアの演奏会(2000.6.23)  
ペーチは十四世紀にできた大学のある町。そのホテ  
ルに泊まった時に、近くのホテルで室内楽の演奏会があ  
るとのパンフレットを見つけた。

アマチュアの演奏会らしいのは判っていたが、入ると  
椅子が二十席ほど準備されている。バイオリン3、チェ  
ロ2、ホルン2の編成で、曲目はK525(Eine Kleine  
Nachtmusik)やK287(Mozart Divertimento)など有名曲。  
聴衆は十数名の質素な音楽会で、飾られた楽団旗(っ)  
にハンガリー語で「マジヤール」と書かれていた。  
マジヤール語は北方のフィンランドやエストニアとと

もにウラル語系に属し、東洋系であるが、容貌は周辺のゲルマン系やスラブ系と何ら変わらない。

◆ポルトガル・リスボン ファドのレストラン(1999.10.21)

ツアードでポルトガルに行く直前にファドの女王、アマリア・ロドリゲスが亡くなった。ファドはポルトガルの国民歌謡のような存在で、美空ひばりが亡くなったようなもの、どこに行っても追悼の曲が流れていた。

どこかコーランの影響が色濃いように思った。耳になじむと癖になる。リスボン最後の日に同行のご夫婦と一緒にファドレストランに出かけた。

ホテルでタクシーに乗ろうとすると、盛んに止める。髭面で心配だというのだ。まさか乗りかかったのに止めるわけにも行かない。幸いファドの店が集中している迷路のようなどころに要領よく案内してくれた。

日本語の案内書にでていたところであるが、数十人の客のなかで大部分は常連客、歌手とのやり取りが面白い。観光客らしいのは私達だけだったようである。

◆プダベスト王宮のバイオリン弾き(2000.6.26)

プダ旧王宮の円柱が並ぶ閑散とした一角で、ひとりの男がバイオリンを弾いていた。ツゴイネルワイゼンの様だったのでロマ(ジブシー)と思ったが、学生か観光客だったかも知れない。

ロマは楽譜なしでこの難曲を弾くという。それにしてこのツゴイネルワイゼンのメロディは中学校の音楽唱

歌として習った。他に「アルルの女」もあった。全国一律の教科書だったので、私達の年代の者は誰でも知っているであろう。

リストのハンガリー狂詩曲にもツゴイネルワイゼンのメロディが採られているという。

◆ブルガリア・ルーマニア国境ドナウ河(2003.6.27)

ドナウ河そしてブルガリアといえは、日本人なら誰もが想うロシア民謡

黒きひとみいずこ わがふるさといずこ

ここは遠きブルガリア ドナウのかなた  
であらう。

現地ガイドに聞くが知らないという。小声で口ずさんで見るとやはり通じない。そこで気がついた。これはソ連の兵士がブルガリア侵攻の時に歌っていた軍歌なのではないか。

後で調べてみて、ロシア民謡と思ったのは間違えて、「カチューシャ」『ともしび』などと共に第二次大戦中に制作された戦時歌謡とのこと。ブルガリアにとってロシアは敵であった。

## 奇遇

百名山目指して山登りに励んでいた頃は、しばしば顔見知りの方に出会った。大体「朝日」とか「毎日」の山

行ツアーに参加していたので、今度はどこなに会うだろうかという位で、奇遇などというほどでは無かった。

しかし、山の顔見知りには海外のホテルや空港で出会うと話しが弾んだ。

海外旅行も山行と同様で、同じ旅行会社のツアーに参加していると見知りの方に会うことは珍しくなかった。

しかし、「奇遇」と言える出会いもあった。

◆フランス ストラスブルグ (1987.9.20)

フランクフルトに泊まって、フランスのストラスブルグまでの日帰り観光に出掛けた。乗り物は十人乗りの小型車で運転手が案内役。

高速道路を運転しながら、結構著名な観光客を案内しているらしく、輿が乗ると後ろ向きになって説明する。ドイツのアウトバーンは制限速度がなく普通二百<sup>km</sup>は出ている。本場にひやひやしながら、なんとか無事にフランクフルトに帰着した。

ホテルで一休みし、暫くしてから中心地まで夕食に出かけた。そこではったり運転手に出会ったのである。全く奇遇であった。人混みのなかで良く気付いたものである。日本人の観光客で、それなりに目立ったのであろうか。

◆エジプトナイル河遡上の観光船 (2002.2.15)

ブダペストのヤーノシユ山 (2000.6.18) に一緒に登ったNさんとナイル河遡上二泊の観光船で偶然再会した。

夜の仮装パーティーで現地の服装をまとったNさんと妻が意外に様になっていた。「化粧」というのはこう言うことをいうのであろうか。

こんなことをだらだら書いていては、何時終わるが判らない。コロナ禍で厳しい最中、「旅行談義」でもあるまいと思いつながら、書き始めて見ると、当人にとっては意外に楽しい作業であった。

最後にまたもう一言。

そもそもコロナ禍では、最も困窮している人達を助けるのが国の責務なのに、観光需要喚起のためとは言え、旅行に行ける恵まれた人達に多額の補助をするのは「論理的な思考」の欠落である。このような政策は状況が悪化すると支離滅裂になる。そうならないことを祈っている。

二〇二〇年十二月七日記